

周辺領域から考える「食と農の社会学」の課題
——社会現象として注目される前の活動に注目して——

東京農業大学 吉野馨子

1 目的

本報告では、社会学をプロパーとしない者が地域の農と食にアプローチする中で、社会学とどのように近接し、どのような「食と農の社会学」に関連する課題を見出してきたかを報告したい。

2 社会現象になる前の営みに注目して

筆者の研究は、農学をベースにした「発展途上国」の地域研究から始まり、関心テーマは“地域の人々はどのように暮らしを成り立たせているか”であった。一般的に社会現象などの形で社会学が注目する前のごく“普通な”農村“社会”の成り立ちを、日々の生存にとって最重要課題である日々の食と燃料、その他生活財の確保に注目することを通して理解しようとしたと言えようか。このアプローチは、暮らしにおいて身の回りの自然への依存度が高い「途上国」研究から始まったことに由来していようし、文化人類学などではごく基本的なものではある。その中で、近代経済学が対象とする商品としての売買以外に、自家生産や地域資源の共的な利用（私的所有の一部放棄も含む）や交換、贈与など、地域の社会関係を伴う様々な営みが見出された（吉野、2013）。筆者の「食と農の社会学」へのアプローチは、「当該社会の置かれた自然的・技術的条件が」「食品選択に影響を及ぼしていること」に注目する「機能主義的アプローチ」（立川、同上）に近いが、それは農村の人々がどのように地域に賦存する資源に働きかけ、必要な資源を手に入れているかに注目してきたからであろう。そしてその社会経済的な階層による相違を捉えるとともに、社会現象としての急速な変容—とくに緑の革命等の国際協力や経済のグローバリゼーションの影響—に注目していくこととなった。

国内調査においても、飯田市での食の地域内自給に関する研究では「地域の人たちは何を食べ、どこから入手しているか」を捉えることにより、自給とやりとりの比重の大きさが明らかとなり（吉野ら、2008）、また、神奈川県足柄地域での農産加工の実態調査では、情報や技術、作ったものの活発なやりとりを通じた社会的ネットワークの存在と「お金なんて考えていたら加工なんてやってられない」という言葉で代表されるような経済価値以外の多様な価値を知ることとなった。

3 みえてきた課題

これらの研究において注目してきたのは、具体的な担い手である。そこで、アンペイドな部分を担う女性たちと、彼女たちが担ってきた暮らしを支える諸活動が周縁化されてきたプロセスが明らかとなる。わが国で農村起業、特産品づくり、地産地消、消費者運動等の活動は女性たちのアンペイドな営みの延長線上にあり、女性たちが担い手とされてきた。農家であれ非農家であれ“主婦”という存在に家族だけでなく社会全体が依存してきたが、“専業主婦”が減少し社会全体が“忙しく”なる中で、その依存体制は破綻しつつある。女性たちのアンペイドな営みの中で商業的に見出され利用されていくものがある一方で、その大半はシャドウなままかろうじて維持されている状況である。それらをもつ社会的ネットワークを強めるセイフティネット的な機能や、農や食自体の喜びや楽しみ、地域資源の活用などの多様な価値が社会的に評価されているとは考えにくい。これから誰が担うのか、という課題に対し、担う必要があるのか（逆に言えば無くなってしまっても良いのか？）、という社会への問いかけから始める必要が生じていると感じている。

文献

立川雅司、2014、「食と農をどう捉えるか」榊渥俊子・谷口吉光・立川雅司編著『食と農の社会学』ミネルヴァ書房。

吉野馨子、2013、『屋敷地林と在地の知』京都大学学術出版会。

吉野馨子・片山千栄・諸藤享子、2008、「住民による農産物の入手と利用からみた地域内自給の実態把握」農林業問題研究 44-3. p45-56.